

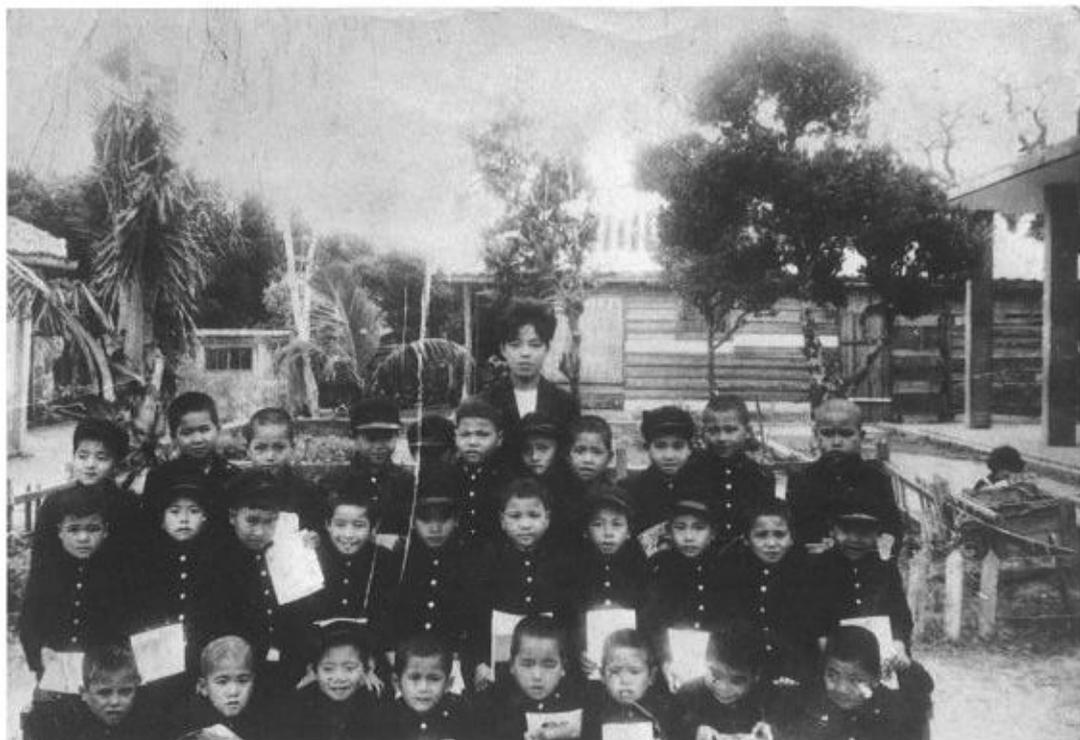
町民参加の町史づくり



# 竹富町史だより

2004・9・30

第26号



## 竹富町史編集室

沖縄県石垣市美崎町2番地  
TEL・FAX兼用(0980)82-9985

## 目次

竹富町史第十一巻資料編「新聞集成VI」を発売	1
《資料紹介》	
波照間島の歴史・伝説考(四)完	2
《写真にみるわが町》24	
墓造りユイマール	29
《新聞で知る町の今昔》16	
南静岡退園者の集団移住計画	30
《文化財探訪》20	
新里村遺跡	31
《聖地めぐり》23	
成屋御嶽	32
収蔵図書紹介	33
業務日誌	34
編集後記	37

### ●表紙の写真●

波照間小中学校の昭和36学年度終業式を記念して撮った、2年生の児童たちである。担任は島崎美恵先生だった。「よいこのあゆみ」を受け取り、ノートをもらって喜びいっぱいの子どもたち。当時、男女合わせて50人以上の学友がおり、そのうち男子は29人。児童のなかには余所へ転校した子供や、亡くなった子もいる。昭和28年4月から同29年3月に生まれた子どもたちだが、今では50、51歳の家庭の大黒柱だ。後方の赤瓦屋根の建物は校長官舎。今では往時の面影はまったく残っていない。向かって左側に図書館、右側に一階建てのコンクリート校舎が見える。

# 竹富町史第十一巻資料編「新聞集成VI」発行

## —昭和三〇年代中・後期を知る貴重な資料集—

竹富町の昭和三十年代中・後期の社会状況等を知る町史第十一巻資料編「新聞集成VI」を、平成十五年度事業として発刊しました。本巻は昭和三十六年一月から同三十九年七月までの竹富町に関する新聞記事を収録したもので、当時の政治、

経済、文化、教育等を詳らかに知ることができ、併せて島々の社会世相および島民の生活も窺知できます。

八重山の戦後社会は、昭和三十年代に入ると、終戦直後の混沌とした社会情勢を乗り越え、次第に落ち着きを取り戻して



発行した第11巻資料編新聞集成VI

「白黒闘争」の政治闘争は相変わらず激しく、沖縄中央の政治情勢が即、八重山にも波及してきました。政党の系列化が進み、立法院議員選挙、首長選挙、市町村議会議員選挙になると、保守系の自民党革新系の社会大衆党（社大党）が激突しての政党政治が行われる

なかで、激烈なる政治情勢を反映、新聞も選挙に関して両政党の立候補者選定の段階から候補者の決定、両陣営の動き、投票、開票の結果、当選および落選した理由の分析など事実関係に基づいて記者の推測、憶測、思惑も含めた報道がなされました。

本町においては、選挙記事もさることながら、この時期には、遅々として進展しない西表島開発構想、西表島伊武田の町有地処分問題、市町村合併問題と町役場移転問題、長期の大干ばつ、西表島の中学校統廃合問題、一年に二度の町長選挙、中型製糖工場設置などが紙面を飾り、世論を喚起しています。

本巻は、戦後八重山で発行された地元紙に限定し、「八重山タイムス」、「八重山毎日新聞」、「八重山朝日新聞」の三紙から、竹富町に関する記事を精選して収録。記事数は一六四九件に上ります。

竹富町史では、新聞記事の資料的重要性を認識し、今後も本土復帰までにわたる「新聞集成」を発刊します。

## 波照間の歴史・伝説考(四)

— 仲本信幸遺稿集 —

### 波照間島の俚諺

#### ◆その他の俚諺

▽「ミシユヌバギバナ オオナリミンシナ」…味噌の発酵時は、香りも味もよくないので、おおなり見せたら味噌作りが下手だと嘲笑されるおそれがある。

▽「ヨイヤ ヨイドムツ」…お祝いは、招かれた人々が物心両面の祝意を表して援助するので、成り立つので心配はいらないことを教えている。

### アヨウ・ユングト・ジラバ・歌謡等の追想

波照間にはアヨウ・ユングト・ジラバ・歌謡等が数多く残されているが、八重山の古言に「アヨウ・ジラバは、波照間の人とかけするな。舟持ちは新城人とかけるな。言葉は西表に習い、言葉の使い方は竹富へ従え」との伝えがあるほど、波照間にはこれらの民謡が数多く歌い継がれていたが、近代になり島民がこれらの維持継承の念が薄く、また率先垂範する先輩がいなかったために、

その殆どが忘れ去られたことは遺憾至極である。

今残っている主なるものの中で、私の知る範囲内で、その作詞、作曲者及び時代を追想し、その概要を記すことにする。

ユングト・アヨウは、日本の万葉時代や室町時代の日本文化の流れを取り入れたのではないかと考えられる。それは楽器の笛・太鼓・鼓(つづみ)・ほら貝等が似ているところから推察しているのである。ジラバは、南方系のような感じがする。例えば、巻き踊りの踊り方や、獅子舞・棒踊り等はドラや笛の音に合わせているからである。これは三味線の入らない以前のもので、十七世紀以前のものと思われる。

歌謡は、三味線以後のもので、当時の役人の作詞作曲によるものが多く、従って首里王府を讃えているものが多いが、なかには圧制に耐え難い苦衷を訴えているものもあり、十八世紀以降のものが多いように窺われる。そのなかからいくつかを取り上げて述べてみたい。

「波照間口説」は、伝説によると、真徳利御嶽の創設の許可を受けて、富嘉村に帰る途中にその喜びを歌ったとのことであるが、作詞作曲は詳かではない。おそらく検査に立ち合った役人の作であろうと思う。

「マユムレヌイシケマ」は、当時の風俗を反映しているが、甘藷のことが詠まれていることから、甘藷の伝来以後の作で、その表現が当時使用の言葉であるが、その讃え方から作詞作曲は石垣から赴任した役人であろう。

「チヨウガ節」も、作詞作曲者は不明であるが、赴任した役人

の作であろう。昔、役人が豊年祭で富嘉村の遙拝所の参拝を終えて、長石御嶽に参る途中、村の青年男女がお伴して、遙拝所から村のはずれまでは「波照間島節」を歌い、そこからミンピケ村のはずれまでは「チョウウガ節」を歌った。そして、ピラチ坂へ差し掛かる頃から「夜雨節」を歌ってサバナコーチを渡って、長石村から迎えに来た青年男女へ渡すのであるが、途中のミンピケ村のミンピケ屋に老翁夫婦があつて、二人で団扇を振って一行を送つた情景が詠まれている。「チョウウガ節」の歌詞は、前句に首里王府を讃え、後句にこの老翁を褒め讃えている。

「夜雨節」は、夜雨を乞うて作られたものであろうが、作詞作曲者は不明である。これは島の人の作ではないかと推測している。「波照間島節」は、大宜味目差の作であることは記録にもはっきり示されている。大宜味目差は文才に優れた人で、この歌の他にも数種の作詞作曲があり、登野城出身の方である。

「シピラハナ節」の作詞は、祖平ウニであるが、この人は唐船の船頭（ウニ）で、唐船の船頭は慶良間島と久高島出身でないといふ如何に優れた航海術の持ち主でも、ウニまで昇進するのが関の山であつた。船頭が頭役（地頭）の位階で、ウニが首里大屋子に並ぶ位階であつた。

この人は秀才で、文才にも秀でていたとの伝説がある。この人が支那へ渡つた時に易者に占つて貰つたら、生まれ故郷の船道がよくないので、航海に難渋しているから新しい道を作るよう示されたので、首里王府の許可を得て、易者の示したとおりに道の方角を変えて新しい船道を造つた。沖縄に戻つて、支那航海に行つ

たところ、航海が安全で無事目的地に安着し、使命を果たして帰沖し、島に帰つて詠んだのが「シピラハナ節」である。

この人は航海術に優れ、唐船の安全率が高いので、琉球王の信賴が篤く、なかなか生まれ故郷に歸して貰えなかつた。妻子が恋しくなつて再三再四帰郷を願ひ出たので、王も遂に許可を与えたのであるが、彼が妻子の許に歸つてしまうと、沖縄に戻らないことを案じて、八重山の在番役人に命じて島へ歸さないように美人を宛い、期限の切れるまで石垣に足止めするよう指示した。在番は王命に従つて新川から美人を求めて宛い、帰郷できなくなつたので、島の妻子を慕つて恋々たる情愛を詠んだのが「ウニヤウンタ」である。

「シピラハナ節」は、沖縄で踊っているヌチバナの後の四つ竹の時の曲に全く同じであるが、この歌を参考にしたか、この歌が「シピラハナ節」のメロディーから採つたのか不明である。沖縄の近代節のほとんどが八重山の歌謡を参考にしてしていることから、私は「シピラハナ節」が先であるように思う。

このウニは、老後故郷に歸つて自宅に礼拝所を造り、琉球の航海安全を祈り、高登盛の上に、首里の王府へ向かつて遙拝所を置き、正月や節々に王府への感謝の儀式を挙げた跡が残つている。スピラウニの活躍した時代を知るには、「シピラハナ節」や「ウニウンタ」の成立年代を調べるとよいと思う。

「村廻り（ブスポー）」は、最近の琉歌を詠じたものであるが、年代も作詞作曲者も不明である。

「バナリメーヌトウ」の作者も不明であるが、歌詞の中に波照

間又ニシヌ渡が詠まれていることから推して、波照間の航海について歌われたものであろう。

ともあれ、波照間では大正の初め頃まで、夜業（フナビ）が続き、若い男女が集合して歌いながら夜業をしている頃までは熱もあつたが、この夜業の廃止と共に民謡の熱も冷めて、古謡も忘れ去られたのは遺憾である。

### 波照間島の造船と航海について

波照間島の造船については、口碑・伝説もなく、いつの頃から始まったかは詳かではなく、年代を押さえることは極めて困難である。

沖繩でマールン船が建造され、この船で琉球管内の交易が出来るようになって、波照間で独占してきた八反帆船と三反帆船が廃止され、六反帆船だけで石垣と波照間を往復して年貢を上納したと、与那国の鬼虎征伐には、波照間から八反帆船の船長（ウヤマシ）アカタナが船団長として往つたこと、赤蜂時代の初期、まだ琉球王府に支配されない以前（およそ五百年前）までは、波照間は遠く東南アジア方面との交易と、かなり古くからこれらの船の建造がなされていたと推測される。

八反帆船や三反帆船がどこで建造されたかは詳かではないが、六反帆船が西表の鹿川で造られたことから、前の二種の船も同じ所で造られたであろう。

鹿川山（西表島の西方最狭地点、高浜より西方、船浮・網取・

崎山に至る一帯を波照間山として区画されて波照間の役人が管理）の樫の木を利用して六反帆船を一年越（三年目）に建造されていたことを記録するほかに資料を求めることは困難であろう。

この波照間山は広くかつ樫の木の多い所を割り当てられたことは、樫の木が船の建材であり、波照間で大型船を造る関係からと言ひ伝えられている。この山の管理に専任する役人は、二人の筆者のうちのシムヤマ筆者が担当し、島の係は山補佐（波照間では訛つてヤープザ）と称した。

山の管理の主な事項を上げると、山林中の生育中の樫の皮に工を切り込んで将来の造船の候補材として育成し、成木については次の造船材として振り当てた。その数の表示は、ヤープザは、ワラ算を使い、役人の筆者は文字で記録して浦元（八重山の役所の本元）へ報告せねばならなかった重大な責任を負わされていたようである。

船浮・網取・崎山の住民は、自分の周囲の山林に勝手に入林することが禁止されており、入林には波照間の役人の許可が必要とされていたのである。また、工印が切り込まれている樫の木は、船材以外に伐ることを厳禁されており、万一これを犯す者には厳罰が課されたという。

以上の如く、船の建材を重要視して管理を強化していることを見て、如何に船の建材に注目し、遠い波照間の役人に管理させていた実例を見て、波照間の先人たちが郡内で造船技術が優れていたことを窺うことができる。

ヤープザが造船のために、鹿川へ渡る前に、波照間で行う行事

の一つに、山嵩ブナガールと称するお祝いがあって、島の代表や造船に関係する連中や村人を招いて、山の幸と作業の安泰を願って盛大に執り行ったので、村中であまりゆとりのある家庭の若者を任命した、東西より一人ずつその任務につけたとのことである。

いよいよ鹿川に渡って仮小屋ができると、山入祈願を厳かに行って入林し、用材の伐採に取りかかりその切り出しを行う前に、タカビ祭を厳肅に行つて搬出した。

この用材が造船現場に運び出されて、造船が始められた。そして、造船が終わつて各自が島へ持ち帰る土産の木材の切り出しが終わると、山止め（ヤマドミ）の祭典（感謝祭）を行つて帰島の日を待つのであるが、この三回の祭典の責任者もヤーブザが当てるのである。

六反帆船の建造に当たつては、島内から腕のある者が大工の総指揮者選ばれ、造船の大工も適当に組み合わされ、山人数も適当な員数が組まれて、古船で鹿川を渡り、各々の分担につくのであるが、この古船は新造船ができるまでは彼地に繋留しておくのである。

山から用材を伐つて運び出し、造船現場に着くと、この樫の丸太を割る作業にかかるのであるが、この割り方は鋸で挽き割るのではなく、斧で両側に相対して掘り下げ掘り残された切れ目に樫木の木矢を打ち込んで二つに割り、外を斧で削つて組み立てに向かつたのである。他の木ではこの方法で割ることができず、樫だけが割れたので、重くて水に沈む樫を用材に使う外に方法がなかつたとのことである。

組み立てについては、船首材には型に従つて曲がつたものを取り出して削つて使い平さく（冊？）を打ち付けて造る方法であつたという。船尾の方は、平冊を型に合わせて作り上げて、マツラ（波照間ではタナジャーと呼ぶ）にもその外板に應じて組み合わせたとのことである。鉄釘がないので、冊に穴を開けて桑木で作つた木釘で継ぎ合わせたり、ビーム（梁木）等は桑の木に楔や釘（クチ）の如きもので縛つたりした。冊と冊の間もこの籐で結びつけた、実に粗末な荒つぱい造り方であつたようである。

以上の如き原始的な方法で建造された六反帆船の帆柱は、松の木のまつすぐに伸びたものを利用し、帆は三角ビーム（い草）で織つた筵みたいなようなもので作り上げるのである。帆柱は二本立てになつていて、主柱につける帆に前に述べた筵を六反使用する船を六反帆船、三反使用する船を三反帆船、八反使用する船を八反帆船と称していた。

上記の様な粗末な造り方は、浸水を充分に防止できないので、ウエス（古着のポロ布、波照間ではヤルハク）を各戸・各人に必要量を割り当てて、ヤーブザが徴集したのである。新造船でもこのポロ布でアカ止めをして、ムチ（しつくい）と竹の皮・油を混合したもの（を塗つて進水させたのである）。

古船でも、目的の一航海を終わつて帰港したら、ドック（船浦）に陸揚げしておいて、出航の時期になると、ポロ布やムチでアカ止めをしてから進水させたのである。

さて、上述の順序で、万事出帆の準備が整つたら、古船（シャマⅡ兄）が新造船（ウトドⅡ弟）を案内して、新造船は処女航海

に就いて鹿川湾を後にし、波照間のイナマ港向け航行する。島に近づくと兄船が新造船(弟船)を港内に誘導して、無事処女航海を終え、船首を陸地に向けて接岸して、保多盛家から持参するスト(生米をすりつぶして白神酒にしたもの)を中間(主柱の立っている所)の船玉(霊)大明神へ差し上げる。

その前に、保多盛家の主人が、新造船の到着を真泊の神前に報告するのである。

斯様にして、新造船は船浦に陸揚げしてフロア祭を持ち、古船は解体される。フロア祭は、牛を屠してその肉を供物として、他の供物とともに船玉大明神猿田彦之神へ航海安全を祈願する大行事で、お祝客は五司の外にイナマ司、大泊司等、船元の保多盛、大嶺、本比田のト二モトの代表が主賓で、役人・村の代表の外に造船に派遣された連中であり、主催者は当年の役者(総代以下十名)で、酒肴は盛沢山の珍味を揃えての大祭典であったのである。このフロア祭の式次は、船首の方の供物は本比田家から出され、中央は保多盛家から、船尾の方の供物は本比田家から出されたのである。この次第は六反帆に統一されるまでは、八反帆は大嶺家の管理(神前への行事の責任者)、六反帆は保多盛家、三反帆船は本比田家の主管であったために、この新造船の供物は三家から出されることになったのである。

古船の船首材は、真泊御嶽の北東の石垣に置かれ、冊板その他の船材は、造船に従事した人々に優先的に配り、残りは適当に処分したとのことである。

### 真泊御嶽

真泊御嶽の由来と年代は詳かではないが、竜宮神の泊まり場所として崇拜し、航海安全を祈願する拝所としていたことが推察される。各島々にある真泊りが港の船着場であることから推察すると、真泊まりは確実に戻って安全に碇泊するの意表であろう。

波照間の真泊御嶽は、郡内で最も古い時代に発祥したであろうと察せられ、伝説によると、支那への貿易が安全に行われる意味から向きを北西へ向けたとのことである。

また、伝説によると、明和の大津波の時は、押し寄せた大波が大泊浜より押し上って、西へ向かって襲来し、佐久田の前野家の畑には一週間も潮水が溜まり、そこへ網を入れて魚を獲る程の力があつたが、真泊御嶽はその東側と北側より津波が抜けて無事であったので人々の信心を深めたと伝えられる。

この真泊御嶽の前方に中央が八反、西方が三反、北方が六反の船浦(船着場)があり、六反帆船の船浦は現代まで利用されていた。

これは余談になるが、神の港と言われていることについて付記する。島の東方から挙がると、フタナフチ(神の口と言われ、島に最初に神が入った口と言われる)、大泊の東側ケーラの下方の浜にある石が神の船のミスネー石と言われる。

オーレロ・マリヤーロ(現在の港口である)、オーレロと称えるのは、メンギチジの上で、神が出船を見送る時に扇を手振りするので、この名称がついたとのことである。

マリヤードと称えるのは、港口が曲がっているためとのことである。港はナリ崎の白クムルは神船の溜場である。

フルマルのアルユゴ、これも神の船着場になっている。サコールプチ、このクムルも西側のブルスパニの前方は、神船の泊まり場で、沖にもスパニの足にもミスネーの穴がある。モイヤラブ・七クルの北西方は、神の船の避難場所といわれている。

### 貿易や航海について

八反帆船や三反帆船が廃止された年代は、記録も口碑もないので不詳であるが、屋久アカマラが年貢米を積んだ八反帆船を奪って部落民を伴って島抜けした口碑から推して、三百年前後まで続いたであろう。

建造の歴史も不明であるが、八重山では竹富島の仲筋村の島仲兄弟が、流木を見てそれを参考にして初めて船を造り、黒島へ渡ったという伝説がある。これが造船の始まりだとすると、波照間はその後になるが、それにしても、大型船の建造は波照間で初めて考案されたことには疑問があるので、私見ではあるが、初めは三反帆船を造ってそれで交易を始め、進んだ造船術を見聞して学び、六反帆船や八反帆船と大型化したであろうと推察される。これを証明していると考えられるのは、本比田家が三反帆船の元締めであり、船元であることである。

また、一説によると本比田家の祖先は、一ヤク千尋、二ヤク万尋の速度で南蛮貿易したとの伝説、本比田家の南西の凹地タバリ

ドウは大昔は海であって、その海に船を浮かべ、その船のミネー石が現在シサンチの高台に記念として置かれ、拝々していると伝えられ、南海岸のヨヌウイダチまで通路があつて、ウイダチには人工的に岩面を削った跡があり、これが本比田家の三反帆船の船浦であるとの口碑がある。また、南蛮の島々と交易したことを記念して彼地に生えていた草花を持参して帰ったので、これにちなんで、この草花をマルブサ（マルバン島の草の意）と命名して、現在もまだ屋敷の周囲に繁茂していると伝えられる。

以上の五つの口碑を総合してみると、本比田家の祖先が、波照間島における船の開祖であると言えると考ええる。

南蛮貿易（東南アジア）—安南（ベトナム）・タイ・ジャワ・スマトラ・マニラ方面へ活発に行つたことは、諸種の物々交換や文化の輸入等で説明できるが、その一端を示している輸入品の中に曲玉、南蛮焼きがあり、香料の如きものが示されている。輸入品の種類は不明であるが、彼地に生産されていない彼等の必需品を持参したであろう。

この貿易に伝説の一つを紹介すると、彼地で働いて帰航中に飲料水が切れたので、ある島に暗夜恐る恐る上陸してカエルの鳴き声を聞いて水のある所を探し、井戸を見つけて水を汲んで戻ると、夜明けが近づき、民家の火明かりを頼って忍び寄って見ると、飯を盛つた後のシャモジについたのをしゃぶっているのを見て、木を食っていると思い、木を食う恐ろしい民族の島であると驚いて大急ぎで逃げ出して船に戻り出航させた。夜が明けて見たら、島の西南方の低地のフコン（福木）ドウの福木が見え、ピタ（本

比田家)の前のナーフコンが見え、南風浜(ペーバマ)が見えたので、母島であることが確認され、安心して上陸してみたら、水を汲んだ所はピタケー(井戸)であり、女がシャモジを舐めていたのは、自分の妻であつたという笑えない伝説がそれを証明している。フコンドゥは、現在タカザの仲本家の地所である。

文化の交流で、現在まで残っているものに、ミルクがある。「ミルク節」に「タイコクヌミルク バガ島にいちもち うかけみしよ 島ぬ主」と歌っているのも南蛮渡来を示しており、他に「南ぬ島棒踊り」、「獅子舞」、「巻き踊り」等も彼の地から輸入したものである。

八重山群島内の交易に八反帆船が使われ、与那国方面の年貢米を石垣の浦元へ運び、浦元に集まつた年貢米、その他の貢納物を沖繩へ運ぶ役割も八反帆船が担当したこと、与那国の鬼虎征伐に、ウヤマスアカタナが船団長(ウヤマス)として八反帆船の総指揮官であつたこと、ヤクアカマラの逃走等の実例から、八反帆船の活動範囲の広さが証明できる。

屋久村跡の西方高台に与那国盛(ユノムル)という石積み火番盛があるが、これは屋久村の住人が与那国と交易する船の目当てであつたとの伝えである。

また、保多盛家の北西方に石垣を広く積んである所は、保多盛の男が与那国の恋人の元に、夕方出発して明け方帰宅する時の目当ての火を焚いた所と言われて、現在でも階段が残っていることから考えられることは、三反帆船の速力が速かつたことが窺われる。現在カミゲン列島内にあるカヌーは、十二人で漕ぐと十二哩

の速度が出そうで、この三反帆船はカヌーに似た船型で十人余りで漕いだであろうと思われる。そうすると与那国まで三、四時間で到着し、彼の地で四時間くらい遊ぶ時間があつたであろう。

昔の帆船は、十二人の船方(船員、昔は船かこうと称す)でないと船の操縦ができなかつたので、船神に十二方あるのもその必要からである。

六反帆船の最後は、石垣島の山原(ヤマバレー)の松材による伝馬船ができるまでであつたが、明治二十八、九年頃であつたことは、父の話で推察されるが、確認の必要がある。その後南方より漂着のラワン材による伝馬船が、フルマルの加屋本の畑の北方で建造されたが、この船は処女航海でイラブ曾根に流されて放棄の止むなきに至つた。この年代は、明治三十四年頃であつたことは、父が大工で建造に関わつたので、毎日伴われて現場に行つていたのでよく記憶している。

その後は、共同で古伝馬船を購入し(東・西組に分かれていた)、石垣間の交通に従事していた。当時は沖繩からマールン船が回航したり、石垣から伝馬船が来たり、商人が出張したりして、沖繩との取り引きも芽を出していた。

マールン船の来航は、明治初年頃から年貢積みにあつたようである。波照間で帆船がかつお船が宮崎から来て操業したのが明治三十九年であり、島民の手によつて帆船を建造し、かつお漁業を始めたのが大正元年で、帆船から発動機船に移つたのが大正九年であるので、この発動機船の古船を利用する機動力による波照間―石垣間の運航がなされるまでの大正末期までは、帆船による運

航がなされ、風の赴くままの至つて不自由な船旅の歴史である。

船の管理保護の責任を持たされていたのがヤブサ（山補佐）で、その輩下に泊番（トマルバン）という係員が各部落に指名されておられ、台風時の陸揚げの場合、また、進水して海上に浮いている時の保護、真泊御嶽、火の神、船小屋等の神前祈願の責任を持たされていた。

台風等の非常時の船の引き揚げのための各部落への通達は、ヤブサが行い、泊番は船の方の作業にかかっていた。

六反帆船の船型は前述のとおりで、下げ潮の時、船底が海底についたら転覆するので差し木をたくさん用意して支え、倒れないようにしたのである。

六反帆船には船子は十二名、左右の舷に櫓が三丁着けてあるの、風の時は交代で漕ぎ出すと一時間で三哩程の速さがあつたとのことである。昔、波照間の人とアヨウ、ユンタを掛けするなと言われたのは、海上が風の時に櫓で漕ぐ場合、氣勢を挙げるためにこれを歌うので、歌の種類を多く覚えていたからである。

また、各島々の前を通る時の掛け声は左記のとおりであつた。船に關しては、父が船頭をしたり、船大工もしていたので、その経験を開けたのは幸いであつた。

#### 火番盛（ヒバンムリ）

昔、情報技術の未発達時代には各島々の要所に火番盛があつて、火によって情報が伝達されていたのである。石垣島では、平

久保崎、石崎、水嵩盛（ミナスクミリ）、西表では野原崎にあり、与那国島には北東の高台にある。各離島では、石を高く積み上げてあつた。波照間では高登盛（コートムル）がそれであつた。

平久保崎で、沖繩から年貢取り立てのマーラン船が見えると、平久保の火番盛に火を焚き、この火が石崎で見えると、火番盛に火が付けられ、この火が水嵩で見えると、水嵩で火が燃やされて浦蔵元へ知らせるのである。川平ではこの盛に火を付けると同時に早馬を仕立てて浦蔵元に通報するが、この早馬が蔵元に到着する前に順風で風がよい時にはマーラン船が速く美崎に着いたとの伝えがある。

野原崎ではこの石崎の火が見えるので、直ちに火番盛に火を起こすと、新城の下地島にある波照間盛に火がついて、波照間から見えるので、上納取り立ての船が来たことを知り、直ちに納税の準備にかつたのである。他は水嵩から竹富、黒島に連絡しており、小浜から両方がよく見えたのである。

一方、年貢を積んだ船が波照間を出航すると、高登盛に火が上がり、新城の下地島に伝わり、黒島、竹富島を経て浦蔵元に連絡がついたのである。

#### 漁業に関する伝説

漁業に関する伝承は多くが、その主なるものを取り上げて記述すると、「タカナヤイズヌヨイン マソピアアンヤツクル」。これを解釈すると、タカナは鷹で、ヨインは暗夜、マソピアアンは網

の種類で、建網である。つまり、「秋鷹の渡る頃になると、夜活動する魚が沿岸に寄って来るので、夜明けに深海へ下る魚を待つ建網（明け待ち網）は大漁する」ということである。ヒラメ（波照間では片ピサユ）が最初に釣れたら、その日は何処へ行っても不漁であるので、早く引き揚げた方がよいといわれたが、私の経験からこの伝承は的中している。

波照間では、「イリズネ マリタル、ブーユー ナユー、アリズネ スナツタル ブーユー ナユー」という古語があり、神司の祝詞のなかでもこれが詠まれている。これを解釈すると、「魚は西方の曾根（イリズネ）の浅い所で生まれて、成長するに従って、東方の深い曾根（アリスネ）へ移動して育つのである」と魚の習性を教えているのである。

トカイユ（イソマグロ）についての口碑では、この魚の習性は、ニシムドルの西側より始まって、次第に西進してデイゴの花の咲く頃にイリコチ（島の北西の入口）に来て大漁し、次第に南西へ回って、旧暦三月のアルミストキにはウアーヌシビ（真徳利御嶽の下方）で大漁を終わってさらに東へ移動し、クネーラ崎より高那崎を経て北進して、ブドウラからヌーピ崎を経て西進し、ニシムドルの東端（サツエーヌパウラ）で終わる、との伝承であるが、この魚の漁だけでなく、その他浅海の魚もこの順序で移動するのである。この伝承の中にあるアルミストキは、毎月の夜遅くから月の出のある時期を指すのである。

この伝承の意味をさらに釈明すると、波照間近海に寄る幼魚は、すべて北西の浅瀬に寄って生まれたりするのであるが、成長する

に従って南下して次第に東方へ移動して、南方中部に移動する頃には充分に外敵に対抗する力がつき、冬期は東方の深い所でも充分に生活する力が養われているのである。

#### ザン（ジユゴン）の発情には警戒せよ

波照間では、ザン（ジユゴン）の雌が発情すると、海中にいる男を襲って抱きつくが、これに抱きつかれて窒息して死ぬ恐れがあるので、雌のザンが人間に向かって来る時には早く陸上に駆け上がるようにと言われて、昔の人はこのことをよく守り、後世の若者へ伝えているのである。

#### 雌イン（エイ）の後尾の穴には絶対に手や足を入れるな

波照間ではエイのことをインと言うのであるが、エイは幼魚がこの穴に入れて保護しているが、エイの尾先には猛毒があるので、これに刺されると中毒して生命を奪われる危険があり、警戒するように、という言い伝えがある。

#### 海亀は竜宮神の使者

竜宮城には、七名の竜宮の神で、海の動植物の管理を掌っていて、その総大将は七光の神という女神である。この神の威光は、七光の如く輝いて、総指揮をしている。この七神のうち誰かが上、

陸して、陸上の神と吟味して決定するために、この神は海亀に乗って来るので、この亀に危害を与えると、竜神の怒りを買って神罰を受けると言われ、島の住民はこれを犯さないよう警告されており、特に陸に上がった亀ほど神罰は強いと注意された。

波照間の住民は敬神思想が強いので、亀の子が孵化して穴から出て行列をなして海へ下るのを見たら、手拭いか、他の布を広げて、その上を通すよう注意を与えていた程であった。

### カラスの民話

昔、波照間にカラスが繁殖して五穀に被害を与えるのみでなく、人家に入って飯を食い荒らしたり、鶏の卵や雛を獲ったり、豚の子まで害するので、島民は困っていた。

そこで、島中の指導者が集まり、鳩首を吟味して、神に祈願してこの島からカラスを除いてもらうことに決まり、神に仕える神人を集めて祈願した。

神は、これを聞き召されて、島からカラスを一羽残らず追い払ったので島民は安堵した。

しかし、間もなく害虫、その他の昆虫が繁殖して、農作物に甚大な被害を与えて、人間は餓死寸前の危機に遭い、これは虫を食うカラスを除いたのが悪かったと悟った。

そこで、再度神に嘆願して、再度カラスを島に呼び戻して、この危機を脱することが出来たので、以来カラスは、神の使いだとして、その殺傷を慎んだので、カラスが繁殖して、現在は損益が

半々になって、半益鳥になっていると伝えられている。

### 牛が鯨になった話

大昔、下田原に親不孝の息子が住んでいた。あるとき、牛を使って田の踏み込み作業をしている時に、津波が襲来して、牛もろとも海に押し流され、人は死亡したが、牛は泳いでいる間に鯨に化身した。この鯨が、初冬の頃、田に水を入れるときになると、故郷が恋しくて島の近くに見舞いに来るのである。

鯨が群をなして動くときの鳴き声は、牛の鳴き声と同じであり、鯨が多く寄る年は、雨が多く、稲は豊作になるとの言い伝えである。この鯨も明治の末までは大群をなして来泳したのであるが、北洋での乱獲のためか、次第に減少し、現在では稀に一頭見るまでに減少している。

### 人魚の話

昔の人が漁師に強く要望したのは、人魚を上陸させると、人魚を通った所は津波に襲われて流失するので、厳重に警戒して絶対に人魚を上陸させてはならないとのことであるが、その概要を述べると次の通りである。

魚釣りのとき、魚がかかったときは、初めは強く引いても、やがて力を失って重いだけ上がってくるが、人魚の場合は人間が糸をたぐるが如く、引っ張ったり軽くしたりする。

このような場合は人魚が掛かっているので、釣り糸を切り捨てて人魚を舟に乗せないことである。万が一油断して乗船させると、泣いて上陸をせがむので、その間はまだよいが、やがて泣きが止まって笑い出し、笑いとともには大波が襲いかかる。早く上陸させてくれと嘆願するので、情けに引かれて上陸させると、この人魚の通った跡は津波に襲われ、大被害を受け、人魚もいなくなることである。

人魚は、顔や髪はまったく人間に似ており、手や乳房も同様であるが、尾びれだけは海老の形をしている。現今では、ジュゴン（ザン）と唱えたり、海馬という所もあるが、この話を照合すると、この二つとも人魚とは違うようである。

#### 牛の屋敷と称える話

昔、本比田（ピタ）の住人が、夜漁のためにウチムルの浜に出ると、大勢の人が集まって舟を引き揚げていたので、どこから来たかと尋ねると、「自分達は人間ではない。天神の命令でこの島に牛の病気を流行らせて、牛を全滅させて来いとのことで、今到着した所で、明日から牛の病気を流行らせる」という。

びっくりしたこの島の住人は、「自分の牛だけは助けたいが、どうすればよいか」と聞いたところ、「君に見つかった以上、仕方がないので、君の牛だけは、屋敷の高台に集めて、首に注連縄をつけ、顔面にアキラザー（貝の名）を三個下げて置きなさい」と言った。

そこで、出漁をやめて急ぎ帰宅したその住人は、夜中に牛を屋敷の側に集め、言われたとおりアキラザーを八個下げて、注連縄を首に回しておいたら、島中の牛は全部病死したのに、この高台に集めた牛だけは助かったという。

以来、この高台を牛の屋敷と称えて、この高台に住む者は伝染病に患わされないと言い伝えられている。

また、牛の病気の魔除けには、牛の角の下に注連縄を回し、この縄にアキラザーの貝殻を下げるようになっていた。

#### 神魚を獲ると神罰を受ける話

神魚に波照間ではグマチと称し、沖縄ではグチラウティと言う。イラブチの一種で大型で、大きなものになると、六十キロを超えるものもある。

この魚は、満潮時に浅瀬に上がって来て、干潮には深海に下り、移動して生活するものである。これが干潮時に浅瀬のリーフ間の溜まりに群がり集まっているときは、神が囲ってあるので、これが神が獲らない先に獲ると、獲った人は神罰を受けて、その家に不幸が続くのである。

神が獲ったかどうかは判明しないので、これは絶対に獲らないよう警告されている。

この魚の他にも、満潮時に浅海に上がり、干潮に下っていく魚が、このような状態を示す場合も要注意で、この神魚に関する話は、西表祖納やその他にも残っている。

## 群がるヤシガニを獲る時の警告

ヤシガニが大群で群がるのに当たると、前向きになつて甲羅をはがして獲り、獲り終わつたら絶対に後戻りして獲らないこと、また、来た道から帰らず道を違えて帰宅するよう、慎まなければならぬと、古人はよく警告したのである。

万一これを犯すと、ヤシガニが怒つて悲鳴を挙げ、泡を吹いてブーブーと音を出し、それが止むと、ブーと鳴る音とともに、獲つた人に飛びついて噛み付き、死に至らず危険があり、また同じ道を通つて帰宅すると、化けネコに追われ、咬み殺される危険があるととの伝説である。

## 貝の群集の場合の獲り方

春先の温かい日の夕刻の干潮時に、小雨の降る日に限つて、砂浜にウシヌピヨンという小貝が群集し、数カ所に大きく盛り上がることもある。

この小貝は水吹きをすると、美味で人は喜んでこれを獲るのである。平常は群れることがないので、これは神が飼つていたので、この群れには手をつけるな、と警告されていた。

もし獲るときは、前向きで獲り、後ろ向きすると古人は教えた。これを犯すと、林の中から石が飛んで来たり、化けネコが追つて来る。

その時、獲つた貝を全部道に捨てて、空にして帰宅すればよい

が、欲張つて残して帰ると、ヨーヨーとヨーチラが鳴くばかりでなく、化けネコに咬み付かれる危険があると諭された。私はこの貝の大群に一度だけ遭つたことがある。

## インカマザムン（魔物）の話

昔から、フカムルの崖穴から、サーサーと音を立てて上陸し、インカマヤマの大岩に来て止まるマザムンがいて、どんな呪術も効かず、祝詞の名人であるガバラのバギツブル（ピタの祖先）でも止めることができなかったとの話である。

それで、だれの忠言も聞き入れず、自分勝手に行動する人をインカマザムンと称していた程で、このマザムンは人々に恐れられていた。このインカマは、富嘉部落の西武堂（ニシンドー）村の西はずれにあり、現在でも大岩の上に木が生い茂り、この高台をインカマヤマと呼んでいる。

## ヨーチラの化け物の話

春先の上、天気が続く、露が多い晩に、島内にある凹地やアブ（洞穴）等で、ヨーヨーと大声で鳴く声が聞こえることがあり、島ではヨーチラの鳴き声と言つて恐れられている。

このヨーチラは、大バジラ（大トカゲ）が化けて鳴くと言われているので、このバジラが地中から這い出して地表に現れる時であるので、これを股間から抜けさせると、これに感わされて危険な目

に遭うと古人は若者に注意を与えていた。

この鳴き声は、尾に二又あるバジラが、地中から這い出すときの宣伝であると言われている。この二又の尾を持つバジラを漁の宿泊所に置くと大漁するという話があり、一度他からもらって進幸丸のカツオ工場（納屋）に置いたが、素晴らしい大漁であった。

### 不吉を告げる鳥の話

▽海トビ（島ではタンタクという）による凶報―海鳥が村の上空に来て飛び回ると、その村から死人が出たり、火災が起こる前兆であるとして、古人は怖がられていた。この鳥が翼を広げて糞を落とす所に不吉が出ると言われて、その家の人は、厄払い開運の祈禱を懸命に行ったのである。

▽マシカクは死者の霊であるとして忌み嫌う―この鳥が夜鳴いて止まる所に死人が出るのであるが、この鳥は、死人の霊が現れる前兆で、不吉であるとして、昔から人々に忌み嫌われている。また、一説では、この鳥は後世（グソー）の使いであるとも言われている。

▽夜ガラスを恐れた伝統―夜ガラスの鳴き声を聞くと、この村から死人が出るか、火難の不吉が起こるので古人はこの鳴き声を聞くとき、魔除けのために白を叩いて、「ナーマヤード」と大声を出し、白を高く打ち鳴らしたのである。その由来は、石垣に伝わる伝説に基づいていて、よく知られた話なので、詳しいことは省略するが、この風習は郡下の各島で広く行われていた。

### 地震の時豆撒きの伝説

古人は地震が起こるのは、地下に潜伏する竜が昇天するため、地上に現れる時の地響きによるものと信じた。そこで、竜が一番嫌がるという豆を「ツカ ツカ」と唱えながら撒いたのである。そこで、ある臆病者が地震の時恐怖のあまり、貯えてあった豆を全部撒き尽くし、播種できずに困ったという笑い話も遺っている。また、地震の原因については、地中に住む大ウナギが年を経て昇天して竜になる時に起こるとの話もあり、ウナギも豆が嫌いなので、「ツカツカニワトマレ」と唱えながら豆を撒くという話である。

### 竜巻と老婦人の古メツツア（パンツ）の話

昔の人は、竜巻は宇宙に住む竜が地上に下るときに起こる暴風で、この竜が一番嫌がるものは老婦人の汚れたメツツア（古パンツ）であるという。そこで、これを竿の先につけて、振り回すと竜巻はこれを避けて遠のいて行き、消えるとの言い伝えがあり、これを実行していた。

また、メツツア（古パンツ）は、魚の刺毒にも効くと言われ、汚れたメツツアを焼いて、その灰を付けると、直ちに痛みが止まると信じられ、これを実行していたが、それは尿素が魚の刺毒に効くことが、長年の経験から知ったのであろうと思う。

## 鬼神の魔除けの石

波照間には、石敢当という言葉はないが、ピチルという石敢当に類似する信仰がある。

例えば、村に通じる道路の突き当たりに大石を立てたり、凹地の突き当たりに石盛を積んだりしてある。

西表島の南西方の海中に獅子の形をした岩があつて、波照間島へ向いているので、それに向けて厄除けのために、高登盛の西高地に、馬の形をした大石を西表島の獅子に向けて置いてある。

この石の後方上部に窪みがあり、そこに水が溜まつているが、西表の獅子石には水の溜まる所がなく、いつも波に打たれているので、結局、波照間の石の方が強く、島は榮えているが、西表島は榮えないとの口碑がある。

シムチの大岩の上に石を置いて拝所しているのは、与那国島からの魔神を除くために置かれたものであり、この石は強く、与那国にはこの石に勝る強い石がなく、この石に鎮座すると神霊が強いとの伝説である。

この波照間のピチル石は、昔中国から伝わった、石敢当の信仰が応用されたものであると考えられる。

## シタマススの地名の由来

真徳利御嶽の中央に、スーインと称する海に通ずる大洞穴がある。最深部の窪みに海水が入りする青く澄んだ溜まりがあり、

魚が見える聖霊地として、島民の崇敬が高く、清潔を誇っている。

ある時、神に対する不敬の者が、この洞穴に下りて、溜水を汲んで口に入れ、塩水であるとこれを溜まりに吐き捨てて帰途中、北方の坂を登って平地に出たところ、舌を出して急死した。この不敬者は神罰を受けて急死したので、この地名をシタマスと唱えたとの伝説である。

## ウラピナのフコンドウの伝説

タカザの仲本家の畑は、昔は凹地で地形が鍋底型になつていて、ナピンドウと言い、その凹地に福木を植林してあつたので、フコンドウとも呼ばれ、遠くから見えることから、航海の目印になつたようである。

## ベミスクブラの鍛冶屋跡

シヤンチの道路の下に大きな洞穴があつて、ここがベミスクブラが鍛冶をやつていた跡であるとの伝説がある。このことを証明しているのが、付近に木炭の粉末が多く見られることと、洞穴の天井が黒く煤煙に染まつた形跡が残つていゝことである。

私共の幼少の頃までは、二メートルくらいまで入ることが出来て、雨宿りしたが、現在はミミズの糞が積み重なつて穴を塞いで、穴の形状はまったく見えなくなつていゝ。

## 鍋を海上に浮かべると海が荒れて暴風雨が来る伝説

波照間では、鍋を海に浮かべると、直ちに海が荒れて暴風雨が襲来するという言い伝えが強く伝わり、昭和の初め頃まで鍋釜を海中で洗うことは嚴重に忌み嫌われていた。この伝説を証明する話として、次の伝説がある。

大昔、七ヶ月も大干ばつが続き、島民は塗炭の苦しみに喘いで、暴風雨でも来て雨を降らせてくれたら、人間の命は助けられるという苦策から、海に鍋を浮かべることになった。そこで、鍋をイナマの港内に浮かべ、真泊の神に祈願して、小舟でその鍋を引っ張って、西廻りでクネラー崎まで航行したところ、直ちに天は真っ黒になり、大暴風雨が襲来して豪雨となった。こうして、水飢饉の悩みが解消され、以来この言葉に拍車がかかり、最近まで続いているという伝説である。

## 気象に関する伝説

▽「ピタヌメーヌ シシャンチヌ ナーフコンヤ 七ネンカヂヌ フカキド スナツダー」——これを釈すると、ピタ（本比田家）の前のシシャンチ（地名）の長く続く福木並木は、七年間台風がなかったために育った」ということで、当時七年間も台風がなかったことを伝えている。

太平洋戦争後の数年間も、大きな台風の襲来がなく、荒廃した農作物の復活を見てようやく食糧不足の苦しみから脱することが

できたのである。

▽「ナチヌシナヌ ナーヌワンヌニシカライルチャ ブーカチャ フカヌー」——これは、「夏の太陽が仲之神島の北方に沈んだら、この年は台風は来ない」ということである。

このことは、地軸の移動によって太陽と地球との位置関係のずれて、台風の進路が変わることが推察される。

## ニンニクと海荒れ

ニンニクは、神の貴重な農作物であり、神前の供物の一番目はこのニンニクを供える。すべての祈願の初めにニンニクを供えることは、農耕作の初めはこのニンニクから始まり、またニンニクは数多く分蘖することから、栄えるという縁起に肖って、神前への供物の王座を占めているのである。

そこで、ニンニクは豊年祭で神前へ御初に供えてからでない、島外へ持ち出してはならず、それを犯すと、神への不敬となり、神を怒らせて、旅行中事故等に遭うから、豊年祭前に島外への持ち出しは厳禁されていて、最近まで実行されていた。

## ピタブーバアとピラチ割の閉塞の伝説

大昔、島が大地震で二つに割れて、高那崎より西方へ続いてピラチウガリの下まで達する大割れ目が出来て、台風の度に潮水が吹き出して作物を枯らし、島民の生活に悪影響を与えていた。こ

れを憂慮したピタブーバアは、天神也神へ祈願し、自ら大石を投

て、来た方向へ退却して行った。

れを憂慮したビタブーバアは、天神地神へ祈願し、自ら大石を投げ込んで、神の加護の下にこの割れを塞ぐことに成功し、以後これから出る潮害から免れたとの伝説があり、ウガルの下方に拝所があるのは、このブーバアの拝々の跡であると伝えられている。

この割れ目は、海に通じているので、山止めの祭事中にこの割れ目の上から、生血の肉を越すと、海が荒れて潮が揚がつて植物を枯らすので、山補佐（ブザ）はその期間中生肉を通さないように厳重に監視していた。その目印として、茅束を大きくウガルの上下に束ねて置いたのである。

このウガルの下方に、豪雨でユナバリドゥに水が充満すると水泡が出ることから、この地中に大きな洞穴のあることが察せられる。

### 魔除けに網を使う理由

昔ある人が、イナマの海に出漁中に、西表の崎山崎と仲之神島との間から、多勢の化け物が島に向かって来たので、逃げる暇がなく、イバシケの海岸に上陸して、自分の持っている網を被って寝ていた。すると、上陸してきた化け物がこの人の被った網の目に「ヨースヌミン、ヤースヌミン」と指を差し入れ、とうとう寝ている人の口にも指を差し込んだので、その指を咬み切った。

化け物はびっくりして、「このヨースヌミン、ヤースヌミンはわれらの指を咬み切る恐ろしい威力があり、この島には怪力があるってわれらを殺すに違いないから、早く逃げた方がよい」と言っ

て、来た方向へ退却して行った。

そのため、以後魔除けには網を張って、「ヨースヌミン、ヤースヌミン」と唱えるようになったという伝説がある。

### 十二貫和尚の流刑とサンキラの伝来

十二貫和尚は有名な坊さんで、支那から琉球に布教のため渡来した人である。この坊さんの指導が高尚であるために、同僚の怨恨を受けて彼等の策略により、波照間島へ流刑の処分を受け、流されて来たのである。

その時持つて来た葉草がサンキラで、種を切らさずに繁殖させるために、人の立ち入りの禁止されている真徳利御嶽の境内に植えて、その薬効を教えるとともに、漢方治療法を教えたり、道徳観念を説くなどして、大いに島民のために尽力した。

この高徳を伝え聞いた琉球王は、彼を赦免して帰沖を命じたが、帰る途中各島々に立ち寄って布教に努めたために、彼の高徳は住民に尊敬されて、この人の話が各所に残っている。

### 天文に関する伝説

古人の言い伝えによると、旧五月三日はハイカブス（南斗星）がアヤグ（併行）する時で夏至になり、美底井戸の底の水が見える。美底村の西北より大泊浜に通ずる二又に分かれた道路三段北端（北へ向かって右側の台地）まで行かないとニシナンチ（北斗

七星)は見えないので、そこまで行って北斗七星を拜んだとのことで、その台座が現在も残っている。この跡には、石碑を立てて記念する必要がある。

ところが現在では、この七つ星は部落内でもよく見えるまでに上方へ動いているのに対して、南斗星は部落内でもよく見えたのが、高台へ行かないと見えない程に南下してしている。これは地軸が北方へ傾きつつあることを示している。

また、南斗星の併行も、古人のいう旧暦五月三日より計算すると、今年(昭和四十八年)は一ヶ月近く遅れて併行しており、人間の作った暦とのずれが大きくなっている。

### ピタパーの大予言

今からおよそ百数十年前(一八五〇年代)、今より五代先の安政の年号の時代に、ピタ(本比田家)に、神霊を伝える霊人(司?)があつたが、この人が子供たちの教訓として話して聞かせたのが次の予言である。この人は靈感が強い霊媒で未来を見透かす予知能力の持ち主であつたといわれる。予言は「くテンドー(くだそうだ)」という口調で語られているが、それは神霊を受け、神の啓示として語られたからである。

沖繩又世ヤ唐又世、首里又御主加那志又世ンナーハツヌギ、シミ又世アワリ又世ヤタスガ、クヌ唐又世ン、御主加那志又世ンツヌガンテンドウ。大和又世ヌミグリクンテンドウ。楽ンステンテンドウ、マハルムヌンホンテンドウ。ケシャルムヌンシステンテンド

ウ。イチユスヌン、マンヌヌン、システンテンドウ。スクムヌヤ、見ルンテンドウ。見ルムノウ、トルンテンドウ。トルムノウ、ホンテンドウ。

ヤシカ、クヌ大和又世ヌ世ン楽又世ン、ナーハツヌガンテンドウ。ウランダーヌ世ヌアワリヌクンテンドウ。ムニウズラサ、フチウズラサナルンテンドウ。

テーマヌ世ヌ、マールクンテンドウ。シキヨウ、ヤラビー(童)ヨウヨウ。ピトヤシーバンヌバタラギダギシャー、ハルヌテンドウ。アマツスクルヌ、ムヌカンゲード、第一テンドウ。

ニシナンチヌ、ビシマリ、マウイガクチャラ、ピトヤグマハナリ、マナヌビイヌ、マタピシガラフキンテンドウ。これを意識すると次のようになる。

沖繩の世は唐の世、首里御主加那志(琉球国王)の世は長らく続き、搾取の世・苦難の世であつたが、この唐の世・琉球国王の世は長く続かないそうだ。

大和(日本)の世が来るそうだ。楽をするそうだ。美味しいものが食べられそうだ。きれいな着物も着けられるそうだ。絹の着物も着けられるようになるそうだ。話しに聞いたものは、やがて見ることが出来るようになり、手に入れることができ、また、食べられるようになる(生活が豊かになる)。

だが、この大和の世、楽の世も長くは続かず、西洋の世の苦難が来るそうだ。言葉が煩わしく(ややこしく、複雑に)なるそうだ。

テーマの世が来るそうだ。子供達よ、よくよく聞きなさいよ。

ドウ、マハルムヌンホンテンドウ。ケシャルムヌンシステンテンド

テーマの世が来るそう。子供達よ、よくよく聞きなさいよ。

人間は手足の働き（肉体労働）だけでは食えないそう。頭の働  
き、物考えが第一だそう。

北斗七星が、頭上を通る時代が来ると、人間は小さくなり、今  
の人間の股間を通り抜けられるようになるそう。

この予言が語られた一八五〇年頃は、琉球王国はまだ健在であ  
ったが、沖縄近海に欧米諸国が出没して開国を求めていたので、  
ある程度将来を予測できたのかも知れないが、学問もない最南端  
の孤島の一婦人が、琉球王国の滅亡―大和世―ウランダ（アメリ  
カ）世―テーマヌ世（現代の情報化社会？）を見事に予見してい  
るのである。

北斗七星は、大昔はもつと低かったようで、北の台地でしか見  
えなかったとの口碑があり、現在は村からでも見える位置まで上  
がっている。これは地球の地軸の傾きの変動（歳差運動）による  
ものであるが、北斗七星が頭上を通るのは、何千年か後のことで、  
何らかの原因で人類が退化（進化？）して小さくなると予言して  
いる。（意識・解説は編者の本田昭正氏）

### 健康に関する伝承

▽「トシヌシイナルチャラ、ウイピトンドマラス」―これは、年  
末になると老人が死亡するという警告である。これを医学的に解  
明すると、旧暦十二月は寒の最も強い時期で、動脈硬化を起し  
やすく、老年になると心臓が弱るので高い血圧のために、心臓衰  
弱による死亡が増えるので、それを警戒させているのである。

▽「シトムチヌ、スフクヌアンシスムヌ、マーバカラサーネヌ」  
―これは、早朝露がまだ乾かぬうちに、道などに張った蜘蛛の糸  
を最初に切って出歩くと、冷えが打ち込んで、健康が害されて長  
生き出来ないとの訓戒である。

▽「ピトヤ、ウツヌカリチャラ、ナガヌチアネヌ」―これは、  
人間は後頭部の毛髪の艶がなくなると、長生きしないということ  
であるが、人間は心臓が弱くなると、頭髪に艶しさがなくなり、  
後頭部の髪の艶しさが失せると、心臓が極度に衰弱していること  
の証拠である。人間の生命は、心臓が維持しているもので、この現  
象のある人は長命せず、やがて死亡することを警告しているの  
である。

### 下八重山（シムヤエマ）の所以

下八重山は、波照間島の別名である。太古、琉球列島に神が天  
下りし給うて、兄の神は、沖縄本島の弁の御嶽に鎮座されて、沖  
縄本島、付近の島々、奄美大島を琉の国と命名して統括され、弟  
の神は、石垣島の於茂登岳に下られて、八重山群島、宮古諸島、  
尖閣諸島を琉の国と命名して統治された。

弟神夫妻の夫の神は、照彦之神、妻の神は照姫之神といわれ、  
台湾は後で生まれたので、この神の子孫が渡って統治し給うとの  
言い伝えである。

また、一説には、琉球に三名の神が天下りし給い、長兄の兄は  
弁の御嶽に止まられ、次男の神は於茂登岳に下り給い、三男の神

は久米島の山に下られて、各々の区域において神の徳を授けたのである。

於茂登の靈山に鎮座する神とともに、妹の神がついて来られたので、兄の神は妹の神に五穀の種を分け与えて、「お前は、南の島に下って、この種を住民に分け与えて統治せよ。そして、ここは上八重山と称するから、お前の行く島は（波照間島）は、下八重山と称えなさい」と指名されたので、以後、下八重山の島・妹（フナリ）の島と呼び、石垣島は兄（ヒギリ）の島と呼んで祈祷するのである。

ところで、兄の神が分け与えた五穀の種の中に、もつとも美味な黍の種を与えてくれなかつたので、妹の神は兄の目を盗んで、ひそかに黍の種を取り、自分の力カン（スカート）の裏に隠して持ち出したので、この黍だけは、神前にお初を差し上げない事になつていと伝えられる。

### 東方より神の渡来

波照間には、東方から神の船が来て、大泊の東のフタナ口から入港し、大泊のケーラの前の海岸に着かれて、海岸に立っている石にとも縄を縛って上陸し、大泊の上の高い石盛（現大切坑の上）に鎮座して、村づくりを始めたとの伝えがある。

それで、豊年祭の巻き踊りのジラバに、「アガロー（東）カラ舟ヌクンチュウ、ペーガーヘニドンガシ、アガロカラ水ヌクンチュウ、ペーガーヘニドンガシ、稲粟マーシオールンチュウ、ペ

ーガーヘニドンガシ」と唱える文句と考え合わせると興味深いものがある。

そこで、このジラバの文句を解釈すると、「東方から舟が来るそうだ。わが家に来る（もたらす？）。東方から水が来るそうだ。（以下同じ）稲粟を運んで来るそうだ。（以下同じ）」の意味で、ペーガはわれわれ、ヘーは家で、ドンガシは来る（もたらす）の意味である。

東方から水が来るのは、雨は東南方洋上に発生して、大陸沿岸に向かつて北上するので、そのことを示している。東方から稲粟どましおーるは、五穀の種の到来の方向を指していると解釈できるのである。

私は、この伝説と関連して考えてみるに、波照間に初めて人間が渡来して住み始めたのは、大泊の海岸であつただろうと推察している。

何故なら、大泊浜の岩石の下から湧き出している水源（ケーラと称す）を最初に見当て、さらに上の陸地に湧き出ているバル水を頼って、その付近に住み着いたことが肯かれるからである。

また、貝塚の在り方、洞穴内の人骨や祈祷場所の所在等を勘案すると、その気がするのである。

このフタナ口は、昔から今に至るまで、神の口と言うことからすると、東から島に近づく船が最初に入れる口は、これ以東にはないので、そこに入ったことは当然に考えられるのである。

このバル水およびケーラの水の湧出は、大切坑の開削により、その口から大量の流水があつたため以後減少し、乾いているのを

見ると、太古、島にまだ人間が住まず、島中ジャングルに覆われていた頃は、この両方だけでなく、他の流水の量も多かったであろうことが窺える。

### 波照間のミンピカーの由来

波照間人を指して、よく「波照間のミンピカー」と言われて、このことは大正の中頃まで言い続けられていた。この代名詞には三通りの説がある。

その一つは、島の南方洋上に、穴の開いた石があつて、それがもとで呼ばれるとの説である。

次に、波照間島民は正直者で、隠し立てがない意味でそう呼ばれたとする説がある。

三つ目には、波照間にミンピケー村があつて、この村の住人は夫婦仲が特によく、正直で温順であつたために、「チヨウガ節」が詠まれる程であつたので、これから出たものであるとの説である。

この三説とも、それなりに理由があるが、私は三番目のミンピケー村の説が正しいように思う。

なお、第一の説と関連があると考えられるのは、カミゲン列島の東南に大きな穴の開いた岩が海中に突出しており、船が通り抜ける大きさで、その中にはイラブウナギがたくさんいるという。この岩から来ていることも考えられる。

### 神杖の伝説

波照間には、三日籠もり、五日籠もり、七日籠もりと称える神行事があつて、女ばかり拝所に立て籠もり祈願をするのであるが、行事挙行の日程の中に、各神の鎮座する聖地に水を差して回る時に使う杖にダチゴ（石垣ではダデフという）を用いるので、その杖を神の杖と称える。この杖については伝説があるので、以下それを紹介する。

昔、東田家の住人が大泊浜の沖合に出漁中、大時化のために遭難して、遙か東方の洋上にある神の島に漂着し、神に救助されて何ひとつ不自由のない生活を恵み賜われて暮らしていたが、年月が経つにつれて故郷の妻子が恋しくなり、神に祈願して帰島の許しを得た。

帰島に当たつて、神は「君の生まれ島は遙か遠い西方にあつて、君ひとりでは行けないから案内をつけよう」と言われて、小さな岳筒を渡され、「これがその案内であるが、この筒は島に上陸してから開けるのであり、航海中は絶対に開けてはならない」との注意を受けて出立した。

船が島に近づき、大泊浜の近くに來たので安心して、好奇心にかられて筒を開けたところ、中からシマ蜂（フン蜂）が出て、東の方へ向かつて飛び去つたかと思う間もなく、この人は元の神の島に戻つていた。

そこで再度神に帰島を嘆願したところ、許可され、例の筒を渡された。今度は神の注意を守り、無事大泊浜に上陸して下田原の

高台まで来たので、そこで筒を開けると、先回と同じくシマ蜂が飛び出して、東天へ舞い去った。

そこで、その方向に合掌し、礼拝して謝意を表し、その筒を記念にその土地に埋めたら、そこからダチゴウが生え出したという。

こうして無事帰島し、家族に会えたことを喜んだこの住人は、毎年その日には、記念すべき場所に行つて供物を供えて礼拝を続けているうちに老衰して杖に頼るようになったので、このダチゴウを切つて自宅と礼拝場所との往復に使つたのが、以後、神前の礼拝の杖に、このダチゴウを使うようになったことである。

昔は、島をフンと称えたり、シマと称えたりしており、この蜂にシマの名が付けられているのは、蜂の王であるとともに、神の使いを果たす役目を持っていると古老から聞いたことがある。

なお、波照間では、古くから虫除けや魔除けの祈祷の折に、畑地や宅地の周囲にこのダチゴウの茎を切つて、その上部を結んだものを差し込むのは、この木の生えた所は神高い所であると印を付けて、魔物が立ち寄らないように警戒させるためである。

### シラ掃除が嚴重に守られる伝説

太古、石垣島の御神崎にある夫婦岩の頂点にあつた笠石が海中に落下したのを元に戻すために、八重山の島々の神が寄り集まつたが、その時に波照間、小浜、黒島、竹富の四島の神は会合に遅れて間に合わなかつた。その遅れを咎められたが、その答弁が振

るつてゐる。

波照間の神は、シラ掃除が嚴重で、七日間は船旅が禁じられたためと答弁し、小浜の神は流木が多くて、それを片付けるために遅れたと述べ、黒島の神は、糞をするために遅れたと答え、竹富の神は、ムスン掃除（海祭害虫除け）が嚴重でそのために遅れたと陳述して、罰を免れるよう嘆願した。

小浜、黒島の神は、理由が立たないため叱られたが、波照間と竹富の神は正しい理由により賞賛され、今後も続けるよう指令を受けたので、以来、この規則が嚴重に守られ、島では昭和の初期まで守られていた。

シラとはお産のことで、ムヌンは害虫駆除の祈願祭である。小浜島では流木を家造りに使つてもよいが、他の島では好ましくなく、波照間では特に流木を家屋材として使うことは厳に禁止されていた。

御神崎は、神々の寄り集まつて協議する靈験の強い所であると、昔から住民は敬遠した所である。

### 波照間で馬が育たなかつた謎

馬は農耕上必要な家畜でありながら、島では昔から馬が飼育されていなかつたのはどうしてか謎がある。

これについては、波照間島は、東西に長いので、島の中央部（アラヤマ）に神の集会所があり、各所に点在する神々の管轄所から集会所まで馬を利用した。

そこで、馬は神の使いであるが、島が小さくて民家まで馬を飼育することは禁じ、これを犯すと神罰を受けて、馬が斃死して育たなかったたので、自然と馬を飼育する者がなかったとの伝説である。

私は若い頃、靈感が強く、靈驗を見たのであるが、ある冬、田に水が満ちていたとき、東より西へ向かつて六頭の馬に神々が乗って馳走する影が田の水面に映るのを見ており、また、白郎原御嶽の遙拝所の正門に、二頭の馬が立っているのと、親盛家の東南角に二頭の馬が東へ向かつて立っているのを見て、この伝説が嘘でないとの確信を得たのである。

神の信仰の中心である登根本の家の門前に、馬を繋ぐ石に穴のあるのもこの物語を示している。

馬を見たことのない島の若者が、石垣島に旅行に来て、坊主が馬に乗って法事に回っているのを見て、大きな赤ん坊が、大きな犬に乗っていると驚いたという笑い話は島に馬がいなかったことを立証している。

### 赤フカは洋上の乗物

干潮時に、海岸の溜まりの中に鱧が眠っているのを殺したり、獲ったりすると、獲った人の家庭では子孫代々に不幸が絶えないので、これには絶対に触れてはならないと島では厳重に警告されていた。

それは、この赤鱧は神の乗り物であり、広範囲の国を統轄する

神の大將が、各島々を分割する部下の神々に伝達する使者が、この島の神に命令を伝えて、返事を受けて帰るまでしばらくの時間の休憩があるので、これが殺されると使者が帰れなくなり、迷惑を受けるので、神罰で不幸が続くとの言い伝えで、漁に出る人はこのことに気を付けて守ったのである。

### 震災の概要とその年代

波照間島は、西表島や仲之神島と同時に出来た第三紀層であるが、周囲にテンブラの衣如き三層に区切られた隆起珊瑚礁によって覆われている。その上に中国大陸から流れて来た赤土が堆積しているので、この上層の隆起の年代は地質学的に解明できると思う。

この島が生まれて以来、三回地震を受けているのが見えるが、この現象は地震と津波の影響であると思われるので、それについて述べてみたい。

第一回目は、地震による地割れのように、その現れは慶原山の岩石の割れで、南北の壁に同一の珊瑚石や貝殻が付着していることである。この地割れは、高那崎とブド浦台地の隔差より慶原山の割れまで続くアブ（吸い込み穴）と、慶原山から北西方にピラチの坂下まで通じるアブ等を勘案すると、この地割れは大地震で地割れや陥没があったことが窺われる。

私は昭和四年から十八年まで、波照間燐鉱の試掘、採鉱に従事して調査に立ち会い、自らも採鉱の指揮に関係していたが、慶原

山の洞穴内を二十メートル下方まで調査した時に、海鳥の化石を発見し、また同所の割れ目の地下二十三メートルくらい掘り下げた所から、当時地球上に生息していたであろう、哺乳動物の骨が出た。

この骨を、東京大学に送って鑑定してもらったところ、このような動物は現在地球上には生息していないとの返信を受けたのである。

それで私は、地下七十五尺くらいの所には化石のあることを認めて、各所でそれを説明しているが、的中して人々をびっくりさせている。該地帯（現在灯台のある位置）は、海拔五十六メートルくらいであるが、この隆起珊瑚礁の二十二メートルくらいから下には種々の化石が探見でき、当時の動植物の在り方を究めるのに役立つとともに、隆起珊瑚礁の形成年代を知るのにも役立つと思つてゐる。

この地割れは、隆起珊瑚礁の後で起つてゐるので、この化石の年代を押しさえることによつてほぼ推測することができるであらうと思はれる。

他方、島の北西方より南東方へ大津波で押し流されて、ヨナバリドゥの凹地に海の各種の石が堆積していることも調査によつて判明してゐて、この津波の高さが三十メートル以上も揚がる威力のあることも立証されている。

明和の津波は、伝説によると大泊海岸より押し上つて、南西方の低地に沿つて押し入り、真泊御嶽を挟んで一方は海に入り、もう一方は御嶽の南方より南西に流れて現製糖工場の所からフルマ

ルの海に流れ出したという。

サコダの現前野家の畑の凹地には一週間くらいも海水が溜まつて網で魚が獲れ、大漁を続けたとの伝説がある。真泊御嶽は、この津波で押し流されずに無事に残つたことから、神靈の偉大さを示すものとして、島民の信仰の念をますます高めたと言われる。明和の大津波は、歴史書に記録に詳しく残されており、それを見ればよいが、起つた年代は十八世紀の後半、一七七一年（明和八）である。

#### 動物の行動による吉凶の予知伝説

先に叙述した「波照間に伝わる縁起」でも触れてあるが、上記の題目に示す動物の行動による吉凶の前兆を知ることが、島ではよく普及してゐた。前に記述したものと重複するものもあるが、漏れたものもあると思はれるので再記述する。

まず、動物の中で予知能力（靈感）の最も勝れているものは、四つ足では犬類で、鳥ではカラスと言われている。下等動物ほど予知能力が強く、大型動物、特に人間が鈍感であり、人間は動物の行動によつて吉凶を予知することができる。

#### ◆四つ足動物の予知能力

▽犬類の中でもキツネやタヌキが最も勝れていると言われるが、当地にはないので、犬について述べると、犬が大声を出して隣

近所をうろついていると、隣近所から死人や変死人が出るが、これは的中するので犬にはこのことが予知されているのであろう。また、犬が多数集まると長吠えすると、その向かっている方向に大火災が起こるといわれている。

▽猫の行動では、猫が後ろ足で立って歩くのを見ると、その飼い主か、家族に不幸な災難を受けることを知らねばならない。また、猫が戸口に立って、室内をきよるきよる眺めると、この家族に不幸の出る前兆である。猫が飼い主の墓へ通うのが見えると、飼い主の魂はすでに墓に行っているのを知らねばならない。鼠が家中から姿を消して寄り付かないと、その家は火災に遭って消失すると言われているが、これは経験がないので謎である。

▽鼠の念仏玉の吉凶：鼠が頭上に電球のような奇怪な光を発して家の桁の上を通ると、家内から死人が出るか、または幸福の光がさすと言われているが、私の経験と他から聞いた事をまとめると、死人が出るようにある。麝香鼠（波照間ではザガ、沖繩ではびーチャー）は、夜中に活動するのであるが、夜道を通るときに前方を左から右へ鳴いてゆつくり消えるときは吉、反対に右から左へ急いで動くときは凶といわれる。このザガが慌てて家の角から屋敷の角へ向かって大きな鳴き声で走ると、この家から不慮の災難に遭うものが出る。反対に門口からナーフク（ひんぶん）の東側よりチンチンと鳴いて、静かに家の戸口に入ると、翌日は金が入ると喜ばれた。

▽クモ（波照間ではブールという）が天井から真っ直ぐ下ると吉事があると言われ、このクモはヨロクンプと言われ、絶対に殺

すなと言われた。

▽百足（むかで）が出ると、海から吉報が来るので、殺すなど言われている。この事を示しているのが、昔の唐船の帆柱の上に向かって旗を掲げていることである。

▽ゴキブリ（波照間ではカムシ）が室内に多く出て飛び回ると、トカキン（イソマグロ）が大漁すると言われるが、これには理由がある。この虫は気温の上がる時に出るので、この時は海水温も上がるので、浮き魚が浮き上がるので、この種の魚が大漁するのである。

▽とかげ（波照間ではバジラ）の尾が二股に分かれているのは島ではヨーチラと言って化けるといわれて警戒されるが、この尾の二つあるのを漁師が屋敷内で飼うと、大漁するといわれて珍重がられている。

▽蛇が交尾しているのはなかなか見当たらないが、万一見たときは、「お前の恥を隠してやろう」と言って、木の枝や草で覆うてこれを殺してはならない。この心得がなく殺すと、家族内のだれかが死難に遭うと言われているから、肝に銘じて注意することである。

▽山羊は雨降りで水溜まりのある場所に居るときは、石の上などの高所に登るのは、水虫（波照間ではキネーラという）に刺されると急死するので、山羊は本能的にこれを知っていて、これを避けるためである。

▽猫と気象：猫が前足で顔を撫でる動作（島ではこれを猫の顔洗い）をするが、これは雨の降る前兆で、鼻の上まで撫でるときは

微雨、目の上までの時は小雨、耳を越すと大雨になるといわれるが、これは大方的中するようである。

▽牧場の牛と気象：牧場の牛が山の頂上に立つと、雨は晴れる。

また、北風が強くて寒いときでも、牛が牧場の北側へ回ると、翌日は風が南へ回って暖かくなる。番所（オーシャ）の前のタカタ道で、牛が高鳴きするとやがて公事（ウヤダリ）が始まって、札人が徴用されると言われて不安がっていた。牛は休息するときは必ず太陽に向かって立つのであるが、これについて古人は、牛は太陽の子であるので生みの親へ尻を向けないのだと伝えた。また、牛の子が産まれて三日目は必ず日の出から日没まで姿を隠すが、これは牛の子が太陽のもとへ蹄を貰いに行くからだと言ひ伝えられている。

▽長石村の北方の林の中にガン小屋があるが、その付近で牛の大きな鳴き声が聞こえたら、島内で死人が出て、このガンが出勤するので、この鳴き声は牛ではなく、ネガンの声であると島民は警戒したのである。

#### ◆鳥類の行動による吉凶と気象の予知

鳥類の予知能力（靈感）は、鳥の種類によって差異があるので、その大略を述べることにする。その能力が最も高いのはカラスで、カラスが水溜まりで、頭だけ水中に入れて水浴すると、やがて小雨が降り、身体全体を水に浸す場合は大雨になる。カラスが墓の上で羽を広げて休んでいるのを見ると、やがてこの墓に死人が葬

られるのである。

カラスが多数集まって、ガアガアと鳴くときは大物の死体が出る前兆である。カラスがナーフク（ヒンブン）の上に来て、カブルカブルと静かに鳴くと、旅からの吉報のあることを知らせている。また、祈願をするとき、そのお初をカラスが受け取ったか否かで、この祈願が神に授受されたか否かを決定するが、これは波照間だけにある信仰の一端である。

カラスは巣の中に卵を四個産むのであるが、その年の農作物やその他の食糧の豊凶によって子を育てるといわれる。親カラスが子ガラスを二羽伴うは平作で、三羽の子を連れてくる年は豊作で、一羽だけの年は大凶作の飢饉年で、台風の多いことや、干ばつを示している。

▽にわとりと気象：雨降りの時に雄鶏が家の上へ上がって鳴くと、やがて雨は晴れ、放し飼いの鶏が天気がよいのに、夕方遅くまで餌を漁ってから木に登ると、翌日は天気が崩れることを示す。また、悪い天気でも早くねぐらに上がると、翌日は良い天気になる。雌鶏が雄鶏のように高い声で鳴くと、その家族に死人やその他の事故のある前兆である。なお、鶏が晴天の続いている時に羽を広げて日光浴をしていると、天気が崩れる前兆である。

▽鶏の鳴き声と吉凶：野鳩が未明に鳴くと、やがて雨になり、天気が崩れる。鳩が夕闇に鳴くと、その付近に死人や事故が起こるが、この不幸は尾の方向に現れる。

▽海トビ（波照間ではタンタクという）の行動は、必ず不幸の前兆を示している。この鳥は、平常は沿岸の海上を飛び回って魚を

獲っているが、休む時だけ海岸沿いの岩のうえに止まり、決して陸の奥には行かない。この鳥が陸上の村の上を飛び回ると、この村内で不幸が起こり、特に糞を落とした家には、必ず不幸が起こると言われ、村人は怖れていた。海鳥が夜陸上を飛び回り、鳴き声が聞こえると、翌日は天候が大きく崩れて、海上は大時化になる前兆である。

▽フクロウには二種類あって、普通のもは小鷹に似ているが、

これよりやや大きく頭上の左右に耳の如きものがあるものを、鳥ではマシカクという。この鳥は後生（グソー）の使いといい、此が自分の屋敷内で鳴いたりすると、縁起が悪いと言つて嫌がつた。▽波照間では野鳥が家屋内に入り、特に仏壇に上がると、祖先の霊が来て止まったと解して怖れたが、石垣島でも同様の説がある。波照間では、これらの鳥は故人の靈魂であると戦慄したが、鳥には死霊生霊を問わず移りやすいようである。

▽甲殻（カニ）類による気象の予知：浜蟹は旧暦二月と十月の寒波の季節には穴を固く閉じているが、この蟹が穴を開けて活動するのを見たら、海は荒れる時節が過ぎたことを示している。水蟹は陸上の水気の多い所に生息しているが、この蟹が穴の出口を塞ぐと、干ばつになる前兆で、干ばつの時に穴をきれいにしておいて開けると、やがて降雨のあることを示している。

▽昆虫と気象：トンボが風の弱い日の夕方、風下の木陰に群集して止まると、その晩に風上の方から強風や、雨の降ることを予告している。波照間にミヤマクブという大型の蜘蛛がいるが、この蜘蛛がそれまで張つて、ある古い巣を破つて、急いで新しい巣

を作り、餌を獲る動作が活発なときは、大時化か台風が来る前兆である。

▽干ばつの時でも、雨蛙（波照間ではジオタという）の鳴くのが聞こえると、雨が近づいていることを教える。

#### 波照間島の人口増加について

波照間の人口が著しく増加したことは、民話や伝説でよく語られ、また、古い記録にもあるが、その理由は謎である。古くから人口の多かつたことを証明しているのは、全島隅々まで開墾されて耕作されていた跡が現在も残つていて、人間の通る道路がほとんど耕地から取り出した石を積んだ所を利用してあることである。拝所と拝所を結びわゆる神道も石を積んだ石垣道である。

また、西表島への自由移民や強制移住によつて建てられた村が四力所もあり、明和の天津波で廃村となつた石垣島の白保、大浜へ八三九名も強制移住させられたことから、島の人口がいかにか多かつたかが分かる。そのため、島の神を祀る三力所の場所には、いずれも洞窟や崖の多いところにあるが、そこにも古くは耕作した島の跡が残つている。

そこで、この人口過密の緩和のために、西表島へ自主的に耕作した伝説を紹介しよう。

まず、南風見への移住であるが、昔、波照間の住民は糸芭蕉を作つてその繊維で着物を作つて生活していたが、人口が増えて農地を広げたため、芭蕉を作る所がなくなった。

この不足を補うために、シムシ村の住人が南風見へ渡り、彼の地で芭蕉を作っていた。ある時、イトナブナサー（水溜まりに生える水草）を見て、ここでも稲が作れるので島へ帰る必要がないと、四名の者が話し合つて居残つたのが、南風見村の始まりであるとの言い伝えがある。

編者（本田昭正）注Ⅱ『八重山島年来記』によると、雍正一二年（一七四三）の記録に「波照間村は、人口が増加し、もはや一四七〇人余になり、耕地が狭いので、古見の内、南風見という所へ人数四〇〇人余を分けて村を建てたいと波照間村の百姓が申し出たところ、「村を建て南風見と称し、与人一人、目差一人が新たに配置された」とのあり、右記の村建てのあと大量移住で、南風見村が成立したものと思われる。

この移住した住民たちは、西表島の波照間岳の頂上より神火が現れて、下田原の東部の高い所に行つて止まると、翌日生まれ島では豊年祭が必ず行われるので、島がよく見える場所へ行つて遙拝することが廃村まで続けられていたとの伝えがある。

右に述べたように、波照間島の住民が健康に優れて人口増加が著しかったのは、島が人間の健康に適した条件に恵まれていたことの一言に尽きるのである。この勝れた条件を挙げるとすると、次のようなことが言えると思う。

まず第一に島の土質がアルカリ性に富み、人体の食物消化に適した穀物の栽培に適したために、この雑穀類が住民の主食となつたこと。

第二に暖流に囲まれて、温暖で年中気温が大差がなく、この気

候条件が人間の健康に大役を果たしていること。なお、島の地形が中央部が盛り上がった台地であるため、海からの清風で清められ、しかも多量のオゾンが運ばれてくるので、健康によいこと。

第三にマラリアをはじめ悪性の風土病がなく、絶海の孤島であるため、伝染病も伝わりにくいこと。

第四にハブなど人の死を招く生物がいなかったこと。また、馬を飼う習慣がないため、破傷風菌がないので、その菌による疾病がなかったこと。

第五に海の動植物を獲つて副食物に多く供したために、蛋白質をはじめ、多くの栄養素が摂取できて、健康を維持してきたこと。

第六に天水田で稲作をしていて、田圃の水持ちを支えるために田の表面を粘土で固める必要があるが、耕作用に牛を多く飼っていた。大飢饉の時はこの牛を屠して食糧の不足を補い、時には産後の婦人の栄養もこれで補っていたのである。

第七に陸上にはソテツをはじめ、人間の栄養を補える植物も多く、これを採っていたことを挙げる必要がある。

第八には主食の穀物が租税に取り上げられたために、租税の対象にならない芋類を多く作つて、主食を補っていたことである。

以上、八項目に示したように、波照間島は健康に適した条件に恵まれたために、人口が増える原因になつたと思われる。（三六）

（訂正）第25号10頁の「葬式の行列に龜を立てる風習」中に掲載の「龜」とあるのは「合龍」の誤り。訂正しておわびします。

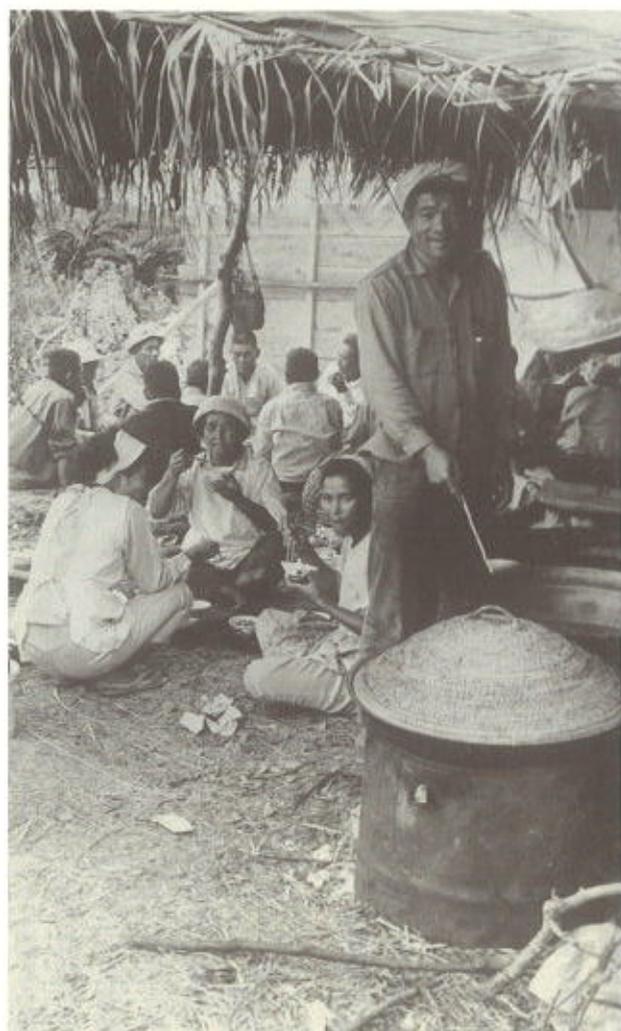
《写真にみるわが町》24

## 暮らしのユイマール

八重山のムラ社会は、古くからユイマールが支えていた。古文書によると、沖繩のユイ慣行は、十八世紀に始まったとされるが、さらに古い時代に遡ることができる、と把握する研究者もいる。

沖繩で一般的に知られるユイマールは、

一つの労働を共同で行うほか、労働力をお互いに交換する形式で機能し、農村共同体を基盤にしていた。労働力の相互補給交換、共同労働の組織がユイマールで島々では共同体精神が息づいていた時代には田畑の仕事、家造り、井戸掘り、耕地開墾などはすべてユイマールで行われた。それが本土復帰を境にヤマト社会の浸透、農業の機械化などが進み、共同労働はほとんど見られなくなった。



墓造り作業の昼食時

波照間ではサトウキビ刈り取りにおいて、ユイマールを基底に賃金制を導入した変則的なユイ慣行が生きている。今でもユイ精神が健在な証であろうか。島は、一九九〇年度農林水産祭むらづくり表彰で、ユイ精神が生きているとして、沖繩総合事務局局長賞を受賞している。表彰された理由は、「みんなで築く村に意義の原点があり、活力あるむらづくりにしていることだった。その前に一九七四年には朝日農業賞を受賞している。

近世期の古文書を見ると、「ぼふ」という言葉に突き当たることがある。「ぼふ」つまり、波照間島という「ボー」のことである。「ボー」もユイマールの一種だが、島の人々を構成員に共同労働を行う。

写真は、一九七二年に東里家の墓を造った時の、「ボー」を知る一齣である。昼食時であろう。ドラム缶を半分に切った竈に置かれた大きなシンメーナーピ。島びとは食事をしながら談笑している。古き時代のユイ慣行を窺わせる光景である。

# 南静園退園者の集団移住計画

南静園とは、ハンセン病患者が療養する宮古島の国立療養所宮古南静園のことである。沖縄県内のハンセン病療養施設は、宮古南静園のほか、名護市屋我地の愛楽園がある。



記事伝える農業センター住民の地区東表西

ハンセン病は、細菌によって起こる慢性の感染症のこと。かつては、業病といわれ、不治の病として怖れられ、患者は迫害され、人間性を否定されてきた。そして、強制隔離され、患者を持つ家族や親族は遺伝性の恐ろしい病として、偏見や差別を受け、肩身の狭い思いを強いられてきた。

だが、今ではプロミンDSの特効薬や

早期発見で根治できる病となり、治癒によって患者も減っている。病の遺伝性は否定され、一九九六年（平成八）、「らい予防法の廃止に関する法律」が制定され、ハンセン病患者や、その家族を無視した法律がようやく終止符を打った。「らい予防法」の廃止等もあり、ハンセン病に対する偏見は薄れている。

それが、八重山では昭和三十年年代まで不治の病として患者および治癒者に対する偏見があった。「八重山朝日新聞」の昭和三十九

年六月十九日付け紙面の見出し「南静園退園者 西表に農業センター」の記事を端緒に郡民のハンセン病に対する認識が浮き彫りになった。

南静園退園者の農業センター設立の報道は、それ以後、「八重山毎日新聞」も加わって両紙で九月頃までにわたり十回余記事化されている。

新聞記事によると、農業センターの設立は、宮古南静園の退園患者が西表島東部の大富と古見の間に広がる第三耕地にサトウキビ、パイナップル、果樹類を栽培するほか、牧場を設営し、肉牛、山羊などを飼育して、農業による退園者の経済自立等を図ろう、というものである。これに対して、東部地区住民は移住開拓者は心身ともに強健にして意志が強固であること、退園入植者は精神的、衛生的に合致しない等の理由を挙げて強固に反対している。記事の行間からハンセン病への偏見が見え隠れる。

農業センター設立問題は、八重山支庁、宮古支庁も巻き込み、設立―反対で世論を二分した。新聞には「農業センター設立反対はハンセン病への無知と偏見であり、残念だ」との投書も見られた。

# 新里村遺跡



石積み跡が残る新里村西遺跡

竹富島の北海岸近くに広がる集落跡の遺跡である。島の一周線道路改修工事に伴う、県教育庁文化課の緊急発掘調査（一九八六、八七年度）によって姿を現し、集落発祥の地として注目されている。遺跡は二つに分かれ、花城井戸を境に東側を新里村東遺跡（十二世紀〜十三世紀）、西側を新里村西遺跡と言い、一九九一年（平成三）九月十一日に町の史跡に指定された。

緊急発掘調査の結果、注目される遺構や遺物が検出された。東遺跡からは、八重山式土器のルーツと思われる滑石製石鐮を模倣した土器、中国製陶磁器の白磁、青磁などが出土、屋敷を囲む石垣は見つからなかったが、掘建て家屋の柱穴跡が発見された。

西遺跡からは、四区画の屋敷跡と一カ所の村落広場、それに穀物を貯蔵したであろう高倉の柱穴跡も検出された。屋敷跡は石積みで囲まれ、村跡全体では十数区画もある。

西遺跡で注目すべきは、石垣と石垣で囲まれた屋敷と、屋敷が幅約七十センチメートルの通用門で結ばれていること。現在の集落では門は道と繋がっているが、新里村では道路がなく、屋敷はすべて通用門で結ばれている。次に、一つの屋敷跡に複数の建物が建っていること。これは、屋敷跡内の柱穴跡の数から確認されている。一つの屋敷に二つ以上の家屋があることは、現在の集落でも窺知できる。母屋（フーヤ）と炊事場（トロー）が別棟になっていることから分かる。

新里村跡は、島の集落の成り立ちを知る原点であり、その後の村の変遷を把握できる極めて重要な史跡である。

# 成屋御嶽

西表島西部の成屋村にあった御嶽。その由来については、『琉球国由来記』（一七一三年）には記載がなく、判然としない。ただ、『宮古八重山両島絵図帳』を見ると、船浮湾東岸、元成屋崎付近に「な



内離島にある成屋御嶽

るや村」があることが分かるが、これにより御嶽は一六〇〇年代初・中期の頃にはすでに創建されていた可能性が高い。

御嶽のあった、成屋村の村落史を繙くと、最初に登場するのが絵図帳の「なるや村」である。「なるや村」は、成屋村のことで入表間切に所属し、高二十五石五斗余。祖納村より船路三十町、船浮村まで十二町五十間である。

それが一六二八年（崇禎元）に施行された三間切制（石垣間切、大浜間切、宮良間切）への移行時には、村名の書き上げがなく、由来記に成屋御嶽が大浜間切慶田城村の項にあることから、慶田城村に包含されている。元成屋からの内離島への移転については、「高山ノ麓ニシテ山猪の害甚シク之ヲ防ク術ニ苦シミ現地ニ移リシト云フ」（南島探験）とあるように、猪の害を避けることが大きな理由だったようだ。移転の時期は、内離島の猪を根絶して開墾の始まった、一七三〇年（雍正八）だという（慶来慶田城由来記）。

『参遺状』によると、一七三七年（乾

隆二）には慶田城村の枝村で村廻り四町一六間、人口三十人。一七六八年（乾隆三三）には慶田城村が西表村と改称されたため、以後西表村の枝村となった。

『琉球国由来記』には、「神名、嶽名同、御イベ名、成ヤ原三離原」とある。御嶽は、一九一六年（大正五）に村びとが対岸の祖納村に移住して廃村となった、旧成屋村跡の一角に現存する。嶽域は広く、拝殿はないが、イビがある。平石に宝珠を載せたイビの入口には香炉と神瓶が置かれる。

平石と宝珠を通り抜けると、大木の傍らに香炉と神瓶の置く、最も神高いイビが鎮座する。イビの後背地は小高い丘になっており、御嶽はこの後背地も含まれるという。それが去る太平洋戦争の時、船浮湾一帯に配備された船浮要塞の司令部があったといわれる。御嶽の近くに神井戸がある。

渡海する本御嶽には容易に行くことができないため、祖納村の前泊御嶽の一角に遙拝所を設ける。関係者は神行事の時には本御嶽に向かって祈りを捧げる。

# 収蔵図書紹介

## 受贈図書紹介

多数の個人、関係機関等から奇贈を受けております。あわせてお礼申しあげます。

寄贈者御芳名	受贈図書名		
竹富町教育委員会	西表島の節祭「祖納編」報告書	那覇市議会	第四卷那覇市議会史資料編3アメリカ統治期(合併前)
石垣在波照間郷友会	創立五十周年記念誌―ベスマ―故里と共に	沖縄県公文図書館	沖縄県公文図書館研究紀要第6号
沖縄県教育委員会	歴代實案校訂本第9冊	宮崎信男加治工真市落照南水吉西園殿	石垣方言語彙一覽
ひめゆり平和祈念資料館	資料館だより32号	琉大図書館	びぶりお一三九号
植松明石	民俗文化研究第4号	読谷村資料編集室	読谷村史第5巻資料編4戦時記録
岩田書院	地方史情報60	那覇市教育委員会	史跡文化財玉陵整備事業
宮良作	沖縄戦の記録―日本軍と戦争マラリア	高城学院女子大学キリスト教文化研究所	沖縄研究ノート13
三木健/大山伸子	沖縄教育音楽論―宮良長包著作集	琉球大学法文人間科学科民俗研究室	シマ第6号
具志頭村立歴史民俗資料館	糸満漁民の展開と港川く海人の歴史と文化	公文書館史料編集室	沖縄県史各論編2考古
ひめゆり平和祈念資料館	平成15年度ひめゆり平和祈念資料館企画展ひめゆり学徒の戦後	公文書館史料編集室	琉球関係檔案第29号
法政大学沖縄文化研究所	法政大学沖縄文化研究所所報第五十四号	公文書館史料編集室	沖縄県史資料編18キャンパススッペ(和訳編)
		法政大学沖縄文化研究所	法政大学沖縄文化研究所所報第五十五号
		法政大学沖縄文化研究所	琉球八重山嶋取調査 全沖縄研究資料
		法政大学沖縄文化研究所	琉球の方言28
		法政大学沖縄文化研究所	琉球の方言29

## 業務日誌

### ◆二〇〇三年（平成一五年）

- 二月二五日  
・琉球大学教授、福島駿介氏、竹富町関係資料収集のため来室。
- 二月二六日  
・新城編専門委員、西大舛高志氏、銅鏡に関する資料提供。
- 平成一五年仕事納め式

### ◆二〇〇四年（平成一六年）

- 一月五日  
・仕事始め式
- 一月六日  
・「新聞集成VI」昭和三九年年次解説、本田昭正氏（町史編集委員）より送付。
- 一月七日  
・西表島大原在住の平田一雄氏より提供の写真資料整理。
- 一月一三日  
・「新聞集成VI」昭和三七年年次解説、當山善堂氏（町史編集委員）よりファックス送付。
- 一月一五日  
・第十巻近代1収録の竹富島喜宝院菟集館文書編集開始。
- 一月二一日

・「新聞集成VI」収録記事目次作成開始。

・第七巻波照間島編、編集要領および総項目作成。

一月二二日

・「新聞集成VI」収録記事目次、昭和三六年目次作成完了。

一月二九日

・読売新聞の鬼東信安記者、竹富島の医療に関する資料を収集のため来室。

一月三〇日

・第七巻波照間島編第二回専門部会開催。玉城功一、本田昭正、新城永佑、仲底善章の各専門委員出席。島の総項目等を検討。

・加藤久子氏、小浜島の寄留民調査のため来室。

一月三一日

・第十巻資料編近代1―竹富島喜宝院菟集館―小委員会開催。編集構成および解題執筆等について審議。

二月五日

・「新聞集成VI」口絵写真選定。

二月九日

・第十九回町史編集委員会資料作成。

二月一一日

・元県議、宮良作氏、「日本軍と戦争マラリア」出版報告のため来室。

二月一四日

・第十九回町史編集委員会開催。次年度の編集計画等を決める。

二月一五日

・鳩間島巡見。講師に鳩間昭一氏を招聘し、島内を徒歩で巡見。

二月十九日

・県史編集室の当山昌直主幹、「宮古・八重山郡漁業調査報告書」所在情報提供。

二月二一日

・第三巻小浜島編第一回専門部会開催。慶田城久、花城正美両委員に委嘱状交付。編集方法、総項目等を審議。

二月二三日

・八重山地域市町村合併協議会、市町史編集分科会開催。

・増田昭子氏（立教大学非常勤講師）、伐採に関する資料収集のため来室。

二月二四日

・石垣市教育委員会の大田静男氏（文化課課長）、戦時中の土地収収に関する資料収集のため来室。

二月二六日

・町史、たより第25号、全原稿執筆完了。

三月一日

・第四巻黒島編第一回専門部会開催。宮良當成氏に委嘱状交付。編集方法、総項目等を審議。

三月二日

・東海大学の北條芳隆助教授、網取貝塚発掘調査報告書を寄贈。

三月四日

・増田昭子氏（立教大学非常勤講師）、波照間島のサツマイモ栽培に関する聞き取り調査のため来室。

三月五日

・金城 善氏（糸満市立中央図書館副館長）来室。戸籍関係論文寄贈。

三月七日

・八重山地域史協議会二〇〇三年度研修会で安良村跡探訪。報道関係者を含め七人参加。

三月一六日

・波平恵美子氏（お茶の水大学教授）、加賀谷真梨氏（お茶の水大学院）、婚姻、出産、性教育に関する資料収集のため来室。

三月二九日

・賀納章雄氏（吹田市教育委員会）、竹富島の伝統的作物―粟の研究論文寄贈。

三月三一日

・町史、たより第25号、(南)八島印刷より納本。

四月二三日

・テレビ東京、竹富島の戦前、戦後の写真一八枚借用。

五月七日

・八重山郷土紙（八重山毎日新聞、八重山日報）原寸大製本契約、(南)沖縄マイクロセンターと締結。

五月一〇日

・台湾大学所蔵の田代安定資料目録、三木 健氏（町史編集委員）よりフアックス寄贈。

五月一四日

・県埋蔵文化財センターの盛本 勲、山本正昭氏、竹富町の戦争

遺跡調査に向けて表敬訪問。

五月二四日

・竹富町立小中学校校長会で通事主事、「竹富町の島々の歴史・文化と町史編集事業」をテーマに講話。

・大城 肇氏（琉球大学教授）、統計資料収集のため来室。

五月二六日

・第十巻資料編近代Ⅰ―竹富島喜宝院蒐集館文書編集、「原勝負検査表」資料作成。

六月二日

・町史だより第25号、関係機関へ発送。

六月三日

・臨時職員として本盛かおり、採用（建設課より異動）。

六月七日

・第十巻資料編近代Ⅰ―竹富島喜宝院蒐集館文書、「報告綴」資料作成。

六月一〇日

・第十巻資料編近代Ⅰ―竹富島喜宝院蒐集館文書、「人頭税領収証綴」文字入力。

六月一五日

・各島の近世から現代までの人口動態表作成。

六月二二日

・県埋蔵文化財センター、西表島西部の戦争遺跡調査実施。職員一人派遣。（二五日まで）

・NHK報道局制作センター、鳩間島鏝節工場の写真、借用。

六月三〇日

・第十巻資料編近代Ⅰ―竹富島喜宝院蒐集館文書編集。各史料から脚注の語句を抽出。

七月二日

・沖縄県地域史協議会二〇〇四年度第一回研修会、糸満市のひめゆり平和祈念館で開催。職員一人出張。（三日まで）

七月六日

・平成十六年度区長会議開催。本年度事業計画説明。

七月一四日

・鳩間島編専門部会開催に向けて同島関係の資料収集。

七月二三日

・町史だより第25号、各区長へ配布。

・八重山地域史協議会二〇〇四年度総会、石垣市史編集課で開催。

七月二九日

・第十巻資料編近代Ⅰ小委員会、教育委員会・農業委員会・町史編集室合同会議室で開催。編集方法などについて審議。

七月三〇日

・第十巻資料編近代Ⅰ小委員会、竹富島喜宝院蒐集館で開催。史料との原文照合のほか、人頭税に関する史料など写真撮影。

八月二日

・第十巻資料編近代Ⅰ―竹富島喜宝院蒐集館文書編集。「間切島会二関スル書類」校正。

・坂本 要氏（東京家政学院筑波女子大学教授）、波照間島のアンガマに関する資料収集のため来室。

## 編集後記

◆『竹富町史だより』第26号を発行しました。本号は、前号に引き続き元町長の仲本信幸が残した遺稿集『波照間島の歴史・伝説考(四)』を中心に編集しました。遺稿集の連載は今号で最終となります。それに「新聞で知る町の今昔」として「南静園退園者の集団移住計画」、「文化財探訪」では竹富島にある「新里村遺跡」、「聖地めぐり」では内離島に鎮座する「成屋遺跡」を紹介しました。

◆「南静園退園者の集団移住計画」は、昭和三十九年六月に「八重山朝日新聞」で最初に取り上げられ、ハンセン病に対する郡民の認識不足が浮き彫りにされました。この計画は、ハンセン病患者の療養施設である南静園を退園した人々が、経済的自立を求めて西表島東部に農業センターを建設しよう、というもので、これに東部地区の住民が猛烈に反対。行政を巻き込んで大きな問題となりました。紙面からハンセン病患者を敬遠することが見え隠れします。この問題は最終的にどのように決着ついたのか、記事から窺い知ることはできないが、農業センターが建設されなかったことから計画は頓挫したようです。(通事)



平成16年9月30日発行

竹富町史だより

第26号

編集発行 竹富町役場町史編集室

沖縄県石垣市美崎町2番地大和ビル2F東

☎ 0980-82-9985